

哲學研究

第九號

第一卷
第九冊

社會學的認識論

米田庄太郎

一

余が茲に社會學的認識論と云ふは佛蘭西のヅルケム派或は社會學年報派と稱せらるゝ一派の社會學者の近頃唱へ出した認識論上の一の新しき試みを指すのである。勿論社會學的認識論と云へば必ずしもヅルケム派の唱ふるが如きものであらねばならぬと云ふのではない。吾人は彼等の主張するが如きものとは異なる社會學的認識論を考へることも出来る。併しとにかく今日の處で社會學者中特に社會學的認識論と稱して稍々組織的に一種の新しき認識論を説いて居るのはヅルケム一派の社會學者のみであつて、外にはないと云ふてもよいと思ふ。されば今日社

會學者の社會學的認識論を論究せんとするに於ては、何人も先づヅルケム派の説に注目せねばならぬ、否な之を措て外に特に注意する程の價值あるものはないかと思ふ。もつともヅルケム派の認識論も後に述ぶる如く、まだ十分組織的に開展されて居らないで之を今日の新カント派の諸種の認識論に比較して見れば、随分と粗雑なものとなはねばならぬ。而も其新じき着眼點或は立脚地には認識論上大に注意す可き或物があると思ふ。然るに我國の哲學者も亦歐米の哲學者もまだヅルケム派の認識論には一向注意して居らない様である。是れ余が本講演に於て少しく該派の認識論に付て論じて見たいと思ふ所以である。要するに余は本講演に於てヅルケム派の社會學的認識論の主意は大體上如何なるものであるかを述べ、而して其は現今の認識論の研究から見て如何なる價值或は意義を有するものであるかを究明すると同時に、認識論上認識の社會學的研究が他の研究と相伴ふて如何に重要なものであるかを示したいと思ふのである。

全體社會學が今日歐米諸國に於て見るが如く盛んに研究されて來たのは、大に學問上の必要或は要求に基いて居るのである。而も實際上の必要或は要求に基くと更に一層大なるものである。何等かの根本的改造を加ふるに非ずは到底收まら

ないと思はるゝ現今の歐米社會の動搖は痛切に社會學の研究を要求して居る。行き詰りつゝある現代歐米社會の發達に、新しき方向を指示し、其進路を照らす光明を與ふるものは社會學であると信ぜられて居る。此くて今日の歐米の社會學者は一般に現實なる實生活問題の研究に殆んど全力を注いで居ると云ふ様な状態である。社會學は純理論的な學問であつて、實際問題の講究は其の職分でないことを十分に意識して居る社會學者にありても、實社會の切實なる要求に引きずられて不知不識に實際問題に手を著けて居ると云ふ有様である。又其純理論的な研究も何か實生活問題に觸れる處がなければ氣がすまぬ様な感じがするのである。社會學者は只實際問題ばかりを研究して居つて、一向理論上の深い研究をやらないと云ふことは、屢々出世間的な哲學者より加へらるゝ非難であるが、併し是れは今日の社會學者の立場を理解しない人々の云ふことで、今日の社會學者はそんな哲學者の如くに出世間的になることを切望しても之を許されないのである。實社會は切迫したる問題をどしどし呈出して社會學者に日々其解決を迫つて居るのである。されど余自身に於ては社會學は本來純理論的な學問であることを確信して常に理論的研究の態度を固守することに勉め、世間向きでは其の要求に應じて一般に實際的な問題を論

述して居るが、大學内に於ては常に理論的な問題を論究して居るのである。されば一般の社會學者にありてはあまり重要視されない様な純理論的な問題にして余にありては甚だ重要を感じざるゝものが少なくない。認識論問題の如きは其の一である。殊に社會學の最も根本的な問題、即ち其の學問の本質を確定し、其學問的研究の主旨を究明する上に認識論の研究の甚だ重要なことを日頃痛切に感じて之れに注意することを怠つて居らないのである。而も之れが研究に費やし得る時間の少なきが爲め、まだ満足なる研究を遂ぐることの出来ないのは甚だ遺憾とする處である。尙ほ自分は到底認識論を専門的に研究することの出来ない境遇にあるのであるから、かつて自から新しき認識論を立てやうと云ふ様な大望を起したことはない、只専門家の研究に従ふて自己の社會學の根本的立脚地を堅めたいと思ふて居つただけである。而も余は不幸にしてまだ其儘に祖述して余の社會學の根柢となし得る様な認識論に遭遇しない。のみならず社會學は實に認識論に依頼するばかりでなく、更に自から認識論の研究に貢獻する事をも勉めねばならないので、認識の社會學的考察は認識論の研究上甚だ重要なものであることを段々覺つて來た。此くて認識論に對する余の態度は受働的からやゝ能働的に轉じて來たのである。

而して此際余の社會學的認識考察に重要なヒントを與へたるものはツルケム派の社會學的認識論である。余は少くも今日の處では、認識の社會學的考察はツルケム派の社會學的認識論の批判的考究より始めるが、最も便宜であり、又有益であると信じて居る。是れ亦茲に該派の社會學的認識論を論じて見たいと思ふ理由の一である。然るに後に述ぶる如く該派の社會學的認識論は該派の社會學的研究の進行中偶然に産出されたる副産物にして、現今の認識論の研究を詳しく批判的に考究したる上にて、其の社會學的考察の必要を十分に意識して立てられたるものではないのである。されば認識の社會學的考察の意義及び重要は該派の人々の論ずる處だけでは十分に理解されなれなと思ふ。それで余は茲に先づ余の見る處に従ふて、現今の認識論研究上其の社會學的考察は如何なる意味にて重要であるかを簡単に論述して置きたいと思ふ。

二

『今近世認識論はカントの創説せるものと認められて居るが、カントの論ずる處によれば認識論の本分は單に認識を箇人の精神作用と見て其の事實を説明すること

にあるのではなく、認識に正しき認識即ち眞理と正しからざる認識即ち虚偽とを區別し、其の正しき認識即ち眞理認識の成立を論究することにあるのである。つまり認識論の問題は眞理問題であるとするのである。而して之を先驗的方法によりて考究せんとする點にカントの認識論の根本的特質があるのである。先驗的方法なるものは實にカントが認識論研究の本質的方法として創設したものである。而してカントの先驗的方法と稱するのは、其精神に於ては總て經驗的心理主義の方法も亦獨斷的形而上學の方法も悉く排斥して、純論理的なる方法である可きものであるが、然るに實際に於てはそうでない。彼の先驗的方法は實際に於ては經驗的心理主義や獨斷的形而上學上の考察を尙ほ幾分混交して居る。随ふて彼の説ける認識論も純論理主義も認識論ではなくして、其處此處に經驗的心理主義や獨斷的形而上學の分子を混交して居る。されば今カントに次で先驗的認識論を更に一段進歩せしめんとすれば、カントの先驗的方法を洗鍊して其中に含まるゝ經驗的心理主義や獨斷的形而上學の分子を悉く排除し、之を純論理的な方法に仕上げ、随ふて彼の認識論を純論理主義の認識論に洗鍊純化すると云ふ方針をとつて進んで行かねばならないのである。されどカントに次で現はれたる獨逸の大哲學者には此方針をとつて進

んだ人は殆んどないと思ふ。ゲッテンゲン派の人々はフリースは實にカントの批評哲學の精神を十分に發揮し、更に一層深く之を開展せしめたる人であると主張し、而してカント以後の獨逸哲學の發達に付て左の如く論んじて居る。「カント以後の獨逸哲學者がカントの眞精神を忘れ批判的方法を去つて、只外觀上壯麗なる體系を立て、徒に世人の目を眩惑せしめて居つた其の間に、世人の毀譽褒貶には一向頓著せず、カントの始めたる眞正なる學問的考察の仕事を彼の開きたる途に沿ふて益々發展させて居つた小數の眞の哲學者があつた。フリースは實に其の中の最も鏘々たるものである。近世獨逸哲學の發達は世上の人氣から云へば、カントより始まりフイヒテ、シエリシグ、ヘーゲル、シヨペンハウアー、ニトチエと續いて行くのであるが、併し眞正なる學問的精神の發達の上から云へば、カントよりフリース、大れよりアーベルトに續くのである。されば眞にカントの後繼者たるの名譽を要求し得るものは世に蹶しき所謂カント派の學者には非ずしてあまり世には知られずに居つたフリース、及びアーベルト一味の學者である。近世自然科學の發達に於てケプラー(ガリレオ及びニュートンの三輻對あるに對して、近世哲學の發達に於てはカント、フリース及びアーベルトの三輻對があると云ふことが出来る) (大要) Abhandlungen der Fritsch'schen Schule

none Folge, Erster Band. 1906. Vorwort. 併し余輩の見る處によれば少くも認識論の方面に於てはフリースは余の上に述べしが如き方針をとつてカントの哲學を發達させやうとは企てゝ居らないと思ふ。彼はカントの先驗的認識論の中に混交する經驗的心理主義の分子を一層強めて、寧ろ先驗主義の精神より一層離れたものであると思ふ。彼は實にカントの先天主義アッリヤクスムに一の堅固なる心理學的基礎を與へんことにも力を盡して居つたのである。而してカントに續て現れたる獨逸の大哲學者は、一般に認識論の方面よりは形而上學の方面に力を注いだが爲めに、哲學の研究は段々認識論を離れて再び純形而上學的となり、而して遂に再び獨斷的な唯心論や又は獨斷的な唯物論に陥つて來た。そこで第十九世紀の中頃よりして再びカントの立場に立ち歸りて、認識の批判的考察を行ふ必要が段々に認められて來て、茲に新カント派の勃興を見ることゝなつたのである。而して新カント派の運動に於て認識論の上から見て特に重要なものは、マルブルヒ派及び西南獨逸派の哲學者の研究であると思ふ。是れ此等の哲學者は何れも余が上に述べし方針、即ちカントの先驗的方法を洗鍊純化して以てカントの認識論以上に進まんとする方針をとつて進んで居るからである。先づマルブルヒ派の研究に就て見るに、此派の哲學者はカントの先驗的方

法を純粹なる先驗的論理的方法に洗鍊純化して、以て純論理主義の認識論を建設せんとして居る。併し實際彼等の先驗的論理的方法と稱するものは、尙ほ先驗的心理学の方法を混交して居つて、嚴密には先驗的論理的方法とは見做し難いものである。そこで西南獨逸派のリッケルト Rickert は先驗的心理学の方法と先驗的論理學の方法とを判然區別して認識の二つの途を説き、又兩者を區別すると同時に、兩者が相互に補充することによりて、始めて認識問題は完全に解決されるものなるを論破した。

恐くはリッケルトの先驗的心理学の方法と先驗的論理學の方法との區別は、カントの先驗的方法を、最もよく洗鍊純化せるものであらう。然るにリッケルトが認識論上今日までに成し遂げたる事を見るも、先驗的方法を如何に洗鍊純化しても只此方法だけで認識問題は完全に根本的に解決し得らるゝものでなく、少くも他の方法を以て之を補はねばならないことが明らかになつて居ると思ふ。而してデルタイ (Dilthey) が記述的心理学と稱し、フッサール (Husserl) が現象學的考察と稱するが如き方法を以て先驗的方法を補ふとするのが、今日若き認識論者の試みつゝあるとて、恐くは、最も正當なる方針であらうと思ふ。然るに現象學的考察なるものは、つまり認識の作用と内容或は對象との區別がまだ起らない以前の意識狀態、即ち直接經驗とか、生きた經

驗とか體驗とか稱せらるゝものゝ立場から考察せんとするものにして、要するに普通に云ふ經驗主義とは異つて居るが、やはり一種の經驗主義的なる考察である。されば認識問題は之を根本的に完全に解決する爲めには、どうしても何等かの經驗主義を根底として、之を以て先驗的方法を補はなければならぬことは明らかであると思ふ。

以上述べし今日の認識論の立場をよく會得して置いて、更に直接經驗と云ふことに就て考へて見ると、是れは今日の哲學者が一般に解して居る意味とは異なる意味にも、解することは出來まいかと云ふ問題が起つてくる。現象學的考察を以て論理的分析を補はねばならぬと云ふ新しき立場に立つて研究して居るフリッシュャイゼン、ケーラーは、思惟は吾人が依つて以て經驗材料を把束する唯一の仕方ではない、吾人の概念の意義は判断に於ける其の機能に於て盡きて居らない吾人が依て以て統一に於て多様を考へる諸關係は只論理的性質だけしか有しないものではない。意識は寧ろ一の生きた或物として考へられ、而して其中に於て諸範疇は經驗の仕方或は様式として、即ち只體驗に於てのみ起る諸關係として吾人に現はるゝものと考へらる可きである云々、*Frischsen-Köhler, Wissenschaft und Wirklichkeit. 1912. Vorwort, S. IV u V*

と云ふて居るが、今此の「意識」は一の生きた或物にして、諸範疇は經驗の仕方或は様式として其中に現はるゝものであると云ふ思想に、時間の觀念を入れて直接經驗の論理的發展の外に其の歴史的發展をも考へることは出來まいか。是れは勿論今日の哲學者の許さないことであらう。彼等は直接經驗に時間の觀念を入れることを許さず其の發展は論理的のものにして、歴史的のものでないと解して居る。而して此く解し得らるゝことは何人も否まないのであらう。併し其の發展を歴史的の意味に解することはどうしても許されないことであらうか。余は直接經驗に於ける發展を論理的の意味に解すると同時に、歴史的の意味に解することも出來ると信ずるのである。また此く解することによりて認識論の研究は、一層十分に、或は豊富に發達するであらうと信ずる。而して今直接經驗に時間の觀念を入れて其の發展を歴史的の意味に解すると、其考察は社會學的のものとなるのである。即ち直接經驗の發展を人類の歴史的發展に於て考究することとなるのである。此くて吾人は先驗的方法を補ふ爲めに、現象學的考察の外に社會學的考察をも用ふることが出來るのである。更に余は社會學的考察の補充は甚だ肝要であると信ずるのである。と云ふのは今日哲學者は普遍的な意識の立場から認識問題を考察して居ると考へて居

るが、併し社會學的に考察して見ると實は現代文化人の意識の立場から考察して居るので、之れに先だつて之れとは異なる自然人民の意識の立場があり、而して其の立場から考察すれば認識問題は尤に其趣きを異にすることが發見されるからである。文化人の意識と自然人の意識とは單に發達の程度を異にするだけでなくして、其類型を異にして居ると思はれる。而して文化人の意識類型は自然人の意識類型の轉化せるものであると思はれる。されば此事をよく理解するときは何故に現代文化人民に於て先驗主義の認識の如きものが發達して來たかを根本的に理解することが出来るのである。そこで社會學的に考察することは、つまり先驗主義の認識論の由來を根本的に理解することによりて、之を補充することとなるのである。余は先づ以上述べし如くに今日の認識論の立場を解することによりて、社會學的考察が認識論上如何に意義あるものであるかを理解することが出来ると信ずるが、次に近來英米の學者の主張によりて盛んになつて來たプラグマチズムの認識論に於て、又社會學的考察が如何に意義あるものであるかを少して論じく置きたいと思ふ。但し余の茲にプラグマチズムの認識論と云ふは普通に解せられて居るよりはやゝ廣き意味に解して居ることを注意されたい。

プラグマチズムの認識論は獨逸流の哲學にありては甚だ淺薄な認識論と見做されて居る。ベルグソンの哲學は其形而上學の方面に於ては甚だ深遠幽妙であるが、其の認識論の方面に於ては一種のプラグマチズムであるから淺薄であると云ふ批評は、吾人の屢々獨逸流の哲學者から聞く處である。成程英米の哲學者が最初に唱へたプラグマチズムの認識論は随分淺薄である。又プラグマチズムの認識論は本來普通の經驗主義の立場から認識問題を研究せんとするものであるから、先驗主義の認識論や現象學的認識論が深奥であると云ふ意味では、所詮深奥となることは出來ない。若し普通の經驗を離れるほど思想の深奥の度合が増すものであるならば、プラグマチズムの認識論は永久に深奥な思想となることは出來ない。併し公平に考へて見れば、そんな意味で深奥であるか、ないかは學理の眞義には關係のないことである。とにかくプラグマチズムの認識論は現實的な認識論である。而して吾人は其の意味を科學的にますます深くして行くことが出來るのである。

却說プラグマチズムの認識論は實用とか、現實生活に於ける有用とか云ふことを

以て、眞理の基礎、標準となすものであるが、其の實用とか有用とか云ふことは、本來は生物學的の、意味のものであつても人類生活の實際に於ては社會學的の意味のものである。されば此認識論は始めより社會學的の色彩を帯びて居るのであるが其の發達するにつれて、益々社會學的となつて居ると思ふのである。余は茲にプラマゲマチズムの認識論を今日最も深く開展せるものと信ずる。澳太利の哲學者イェルザレム(Jerusalem)の認識論に就て、只今述べし事實を證明して見たいと思ふ。イェルザレムは自分の認識論を發生的及び生物學的認識論と稱して居る。而して生物學的の地盤の上に心理學的に認識問題を論究するを眼目として居る。併し其中に處々に社會學的考察を交へて居る。是れ彼が其の「哲學序論」(Einleitung in die Philosophie. 1. A. 1899. 6. A. 1913)に於て論述して居る認識論の大體上の傾向であるが、其後彼は或雜誌に「認識の社會學」Die Sociologie des Erkennens, Zukunft. 1909. と題する一論文を發表して居るが、其中に彼の認識論の立場を簡單に述べて、左の如くに云ふて居る。「認識に於ては社會的因素と箇人的因素とは常に協働して居る。而して吾人は社會進歩の光りに照らして考察する時に、始めて人間の認識の成立及び妥當を正當に理解し、又評價することが出来るのである」。是に依つて吾人はイェルザレムの認識論が如何に社會學的考察

を重んじ社會學的となつて來たかを朋らかに理解することが出来る。彼は實に社會進化の光りに照らして考察する時に、始めて人間の認識の成立及び妥當を正當に理解し又評價することが出来るのである」とまで云ふて居るのである。併し余輩はイェルザレムの認識論に於て、今尙ほ最も不完全なる點は、彼の社會學的考察の不充分なることから來て居るのであるまいかと思ふ。それで余はイェルザレムの認識論は今一層深く社會學的に精鍊されることが必要であると考へて居る。併し此の事はとにかくとして、以上簡単に述べしだけでも、プラグマチズムの認識論に於て社會學的考察は如何に意義あるものの、或は重要なるものであるかは明らかに理解されやうと思ふ。

終りに以上述べしが如き認識論とは異なる見解をとり、認識論の職分は眞理問題を考察することではなくして、認識の事實を説明し、認識の發達を研究することであると解することも出来る。而してかゝる認識論は以前には單に心理學的に考察すべきものと考へられて居つたが、今日の研究状態に於ては單に心理學的に考察するだけでは充分でないとは明らかである。吾人は一方に於て生物學的考察によりて心理學的考察を深くして行かなければならないと同時に、他方に於ては社會學的

考察によりて之を展開して行かねばならぬ。全體今日の研究から考へて見ると、心理學的と云ふことは、生物學的と云ふことと社會學的と云ふこととの摩擦から發現し發達するものにして、生物學的と社會學的とより離して見るときは到底心理學的の意味を十分に理解するとは出來ないのである。平たく云へば生物が物質的外界と關係し又相互に關係することによりて茲に心理現象は發達するのである。殊に重要なるは生物相互の關係である。要するに認識の成立及び發達は生物學的考察と社會學的考察との下に於て心理學的に説明せらるべきものであるのである。されば此の種の認識論に於て社會學的考察が如何に重要であるかは、別に詳しく論述しなくとも明らかに理解されやうと思ふ。

以上述べし處によりて、認識論研究の現象に於て、其の何れの方面にありても社會學的考察が如何に意義あるものであるかは、明らかに理解されやうと思ふ。而して此事をよく理解して置くと、今日ヅルケム一派の唱ふる社會學的認識論の如きものが現れてくるのは敢て不思議でないことが又よく理解されるのである。併し茲に注意して置きたいことがある。夫れはヅルケム一派の社會學者が社會學的認識論を唱へ出したのは、余が上に述べしが如くに認識論の研究の現状をよく吟味して、如

何なる意味に於て社會學的考察が必要であるかをよく理解した上の事ではなくして、寧ろ彼等の社會學的研究が進むにつれて彼等が偶然認識問題に觸れて來た際に偶然の思ひ付きから之を唱へ出したのであらうと云ふことである。つまり彼等は認識論の現状をよく考察した上で、社會學的認識論と云ふ様なものを建設して見やうと云ふ考へを起して、之を唱へ出したのではなくして、社會學的研究を進めて行く中に偶然認識問題に觸れて來たが其際にふと思ひ附いて社會學上から認識論を考究し始めたのである。此事はツルケム派の社會學の發達を見ても明らかに理解されるが、更にツルケム自身が其最近の好著作「宗教的生活の元素的諸形態」(Durkheim, *Les formes élémentaires de la vie religieuse*, 1912)の序論中に論じて居る事を考ふると一層明らかに理解されるのである。彼は此の序論中に始めて彼の社會學的認識論の態度と一般的考察をやゝ組織的に述べて居るのであるが、彼は先づ彼の認識論の研究は宗教的社會學の研究の副次的目的である事を述べ、夫れより現今の認識論に對する彼の社會學的認識論の態度を論述して居るが、其の現今の認識論として先天主義の認識論及び經驗主義の認識論を論評する處を見るに、彼は現今の認識論に就てあまり深く研究して居らないことが明らかに察せられるのである。(但し此序論は本書の

出版される前一論文として、千九百九九年に *Revue de métaphisique et de morale* に於て *Sociologie religieuse et théorie de la connaissance* と云ふ題名で公にされて居る。されば *ゾルケム* の社會學的認識論なるものは、今日の處では社會學的認識論と云ふ名乗を上げて居る唯一の認識論であるに係らず、まだ随分と粗雜なものである。且つまだ組織的に之を詳論せる何等の著作も公にされて居らない。只彼が其の一般的態度を明らかにして居ることと、彼及び彼の門下の二三の學者が數々の認識問題に就てやゝ詳しく研究を試みて居ることが、彼等の認識論上の事業として今日世に呈出されて居る總てであるのである。尙ほ余の見る處によれば、彼等の著作論文よりも *レヴィ*、*ブリユル* の著作「劣等社會に於ける心理機能」(*Lévy-Bruhl, Les fonctions mentales dans les Sociétés inférieures, 1910.*)の方が認識の社會學的考察に對して一層貢獻する處が多いかと思はれるのである。但し *レヴィ*、*ブリユル* は *ソールボンヌ* 大學の哲學の教授にして堂たる佛蘭西の一哲學者であり *ゾルケム* の門下の學者と見ることは出来ないが併し彼はとにかく、*ゾルケム* の社會學の原理となつて居る幾多の思想を承認し、而して右の著作は大體上 *ゾルケム* の社會學の立場から書かれたもので、且つ *ゾルケム* の發行して居る社會學年報叢書中の一冊として公にされて居るから、余は茲には *レヴィ*、

ブリユルの説をもツルケム派の説の一發展と見て考察することとする。尙ほレザイ、ブリユルの説にはツルケムの説とは異なる點があり、而してツルケムは其點に就てレザイ、ブリユルに反對して居るが、併し認識論の研究の上から見るとレザイ、ブリユルの考への方が一層面白いと思はれる。それで余は茲に先づツルケムの社會學的認識論の主意を簡単に述べた上で、更にレザイ、ブリユルの説に就ても考察して見たいと思ふのである。

四

今ツルケムの社會學的認識論はさきに述べし如く、彼の社會學的研究の副産物である。されば之を根本的によく理解する爲めには彼の社會學の原理から考究して行かねばならぬ。併し茲に彼の社會學の原理を詳しく論じて居る暇はないから、特に彼の認識論の主意を理解するに必要な方面だけを極簡単に述べて置かうと思ふ。ツルケムの社會學上の著作は左の四冊である。

De la division du travail Social. 1893.

Les règles de la méthode Sociologique. 1895.

Le Suicide ; Étude de Sociologie. 1897.

Les formes élémentaires de la vie religieuse. 1912.

此の中で彼の認識論の主意を、組織的に論述して居るものは *Les formes élémentaires de la vie religieuse* である。而して彼の公にせる多數の論文中特に認識論の研究に重要なものぢ

De quelques formes primitives de classification à l'étude des représentations collectives ; *Année Sociologique*, VI. 1903.

Représentations individuelles et représentations collectives ; *Revue de Métaphysique et de morale*, 1868.

La Sociologie religieuse et théorie de la connaissance ; *Revue de Métaphysique et de morale*, 1909.

Le problème religieux et la religion et la dualité de la nature humaine ; *Bulletin de Société de philosophie* ; 1913.

又ツェルケム門下の學者の公にせる論文の中で特に認識論の研究に重要なものは *Mauss, Essai sur les variations Saisonnières des Sociétés Eskimos, essai de morphologie Sociale* ;

L'Année sociologique, IX, 1906.

Hertz, Contribution à une Étude Sur la représentation collective de la mort; L'Année sociologique, X, 1907.

Hubert et Mauss. Étude sommaire de la représentation du temps dans la religion et dans la magie; Mélanges d'histoire des religions. 1909.

今社會的事實は社會的事實によりて説明せらるべきものであると云ふことを社會學上の一原則として始めて詳しく論述したるは、澳大利の社會學者グムプロヴィクツ(Gumplovicz, Grundriss der Sociologie, 1885.)であるが、ツェルケムもやはり同じ見解を抱て居つて、社會的事實を箇人心理の上から説明せんとする見解には、極力反對して居る。然らば先づ彼の社會的事實と云ふは如何なるものであるかと云ふに、彼は之を定義して、箇人意識の外に存立して、而して箇人意識に自己を推し附ける處の行動し、考へ又は感ずる仕方である」と云ふて居る。術語を以て云へば社會事實とは本來集團意識の事實或は集團心理現象にて、集團的表象、集團的感情及び集團的傾向等より成り、箇人意識の外に存在して箇人意識に對して不許不の性質を有するもの、即ち精神的に之を強制するものである。要するに、ツェルケムは箇人意識の外に存在すると云ふ

こと、精神的に箇人意識を強制すると云ふことを以て、社會的事實の根本的な二特徴を見るのである。然らば此の如き性質を具へたる社會的事實は、如何にして生起し、發達するか。之を箇人心理の上から説明せんとするは、多くの社會學者のとれる方針であるが、ヅルケムは斷然之に反對してあくまでも社會的集團的事實によりて、之を説明せんとするのである。隨ふて彼の立場から見れば、一定の最も根本的な社會的集團的事實を認め、之を根抵として一切の社會現象が生起し發達するものと解釋しなければならぬ。そこでヅルケムは社會的或は集團的境遇ミヤド或は地盤ソノアシを以て此の根本的な事實と認めんとするのである。然らば彼が社會的境遇或は地盤ソノアシと稱するものは如何なるものであるか。彼の最初の社會學上の著作「社會的分業論」に於ては、彼は社會的境遇を社會の容量即ち人員の數と社會の密度、即ち人口の集中の度合とに分折し、此の容量と密度は社會の進歩を説明し、又之を決定する根本的原因であると説いて居る。而して此の社會の容量及び密度の變動によりて、如何にして分業が發達し、更に其の分業の發達に伴ふて、諸般の社會現象が進化し、人格が發達するかを説明せんとすることが、即ち「社會的分業論」の主眼となつて居るのである。併し本書に於て彼が特に注意を拂ふて居るのは主として法律現象道德現象等である。

而して彼は社會の密度と云ふことを専ら物質的の意味に解して居る。そこで一見すれば彼は、唯物主義的純器械主義的に社會の進化を説明せんとするものの如く思はれるのである。併し其の次に公にせる著書、社會學的方法の規則に於ては、彼は社會の密度と云ふことを改めて特に動的密度と稱し、之を一層廣き意味に解して、其中に精神的の意味をも含ませるのみならず、殊に之を重んじ、物質的密度は只精神的密度の補助物であつて、而して又一般に其の隨伴物であるとまで云ふて居る。されど其後彼は法律現象及び道德現象の研究より宗教現象の研究に進み、今日の如く特に宗教現象の研究に専ら力を盡すに至るまでは、社會的境遇或は地盤と云ふを主として物質的の意味に解する傾向が強い、少くも其の物質的方面から見て社會現象を説明せんとする傾向が強かつたと思ふ。

ツルケムは上に述べし如く社會的境遇或は地盤は社會の容量及び社會の密度によりて決定されるものと見るのであるが、此くの如くに解するに於ては、社會的境遇或は地盤は即ち社會の形態であることと見ることが出来る。此くて彼は之を研究することを社會形態學と稱して居る。さればツルケムの社會學はつまり社會形態學を中心として一切の社會現象を説明せんとするものである。即ち社會現象の形態學

的説明と云ふことが彼の社會學の眼目となつて居るのである。而して彼は此見解よりして上に述べし如く先づ分業の研究を試みたる後、次に自殺を研究し、自殺論を公にして自殺は如何に社會の形態的類型によりて決定されるかを論證せんと試みて居るが、夫れより彼は更に原始人民の知力的機能の研究を試みた。而して茲に彼は始めて認識の社會學的研究に觸れて來たのである。彼は原始人民の事物の分類の組織及び概念の組織を研究して見ると、是れは彼等の社會組織、社會の形態に對應して居るとこや、又彼等の時間の觀念は彼等の團體的行動の律動に對應して居るとこや、又彼等の空間の觀念は彼等の團結の様式に對應して居ること等を發見した。而して彼の門下の學者によりて此方面の研究はますます詳しく行はれて來た。併し此時分にはツルケム自身も亦彼の門下の學者も、別に社會學的認識論と云ふ様なものを新たに建設しやうと云ふ様な考へをまだ起して居らなかつた様に思はれる。然るにツルケムが自然人民の研究に大に興味と必要とを感じて、之れが研究に力を注ぐに至つて、彼等の間に於て道德や法律の奥に常に宗教の存在することを覺り、更に諸般の社會的制度も總て宗教の淵源より流れ出て居ることを覺り、此くて彼は宗教社會學を以て社會學の基礎と見る様になつて來たのである。而して此事はつ

まりヅルケムは社會生活に於ける觀念的勢力の甚だ重大なるを認めて來たことを意味するのである。そこで彼の社會的境遇或は地盤の觀念彼の社會形態學的考察の觀念は近頃實際上重要な變動を受けて來たと思ふ。もつとも始めより彼の社會的境遇の觀念は純物質的のものではなかつた。此事はさきにも述べて置いた通りである。併し少くも其の物質的方面に特に注目して社會現象の説明を企て、居つたことは疑はれない事實と思ふ。然るに其後宗教の重要を認めて大に之れが研究に力を注ぐに至つて、實際上觀念的勢力は從來彼の研究に於て見ることが出來なかつたほど重要なものとなつて居る。要するにヅルケムの社會學的考察は大體上物質主義的考察を重んずる方針から大に觀念主義的考察を重んずる方針に近來著しく轉じて來たと云はねばならぬと思ふ。彼の門下の學者中には此方針の轉向を出來るだけ軽く見て、別に方針の轉向と云ふ程のものでなく、只從來とは少しく着眼點を變じて來たぐらひの事に過ぎないのであると云ふ様に辯明して居る人々もある。若しそうであればそれでよい。余輩は別にこんな事で彼等と議論を闘はさうとは思はぬ。とにかく近來彼等は社會生活に於ける觀念的勢力を大に重要視して來たことは事實である。而して又夫れが爲めに從來の解釋に少くも種々修正を加

ふる必要が起つて來やうと思ふ。

却説ヅルケムはさきに述べし如く、以前の立場からしても既に認識論問題に觸れて來て居つたのである。併し彼が意識的に社會學的認識論を建設しやうと云ふ様な考へを起して來たのは、近來宗教社會學を以て社會學の基礎或は基本的部門であるが如くに觀念するに至つた後であると思ふ。而して此事は彼の最近の著作宗教的生活の元素的諸形態に於て明らかに理解されると思ふ。さきに述べし如くヅルケムは本書の序論及び結論に於て彼の社會學的認識論の態度及び其の一般的思想を始めやゝ組織的に論述して居るのであるから、茲には主として是れによりて彼の社會學的認識論なるものは大體上如何なるものであるかを示さんとするのであるが、今彼の論ずる處によると、哲學及び科學は總ての他の社會現象と同じく宗教から生れたものである。而して此の事はつまり哲學及び科學の生まるゝ以前には宗教は彼等の役目を演じて居つたことを意味するのである。併し宗教は單に前以て既に形成されて居つた精神に幾多の觀念を與へて其内容を豊富にすると云ふだけのものでない。更に精神其物の形成に大に貢獻するのである。即ち精神が知識を整理する形式其の物、哲學者の云ふ悟性の範疇(空間、時間、類、數原因、本體、人格等の概念)

其物は宗教に於て又宗教より生れ出でたるものである。つまり思惟の諸範疇は宗教的思想の生産物である。然るに宗教は殊に勝れて社會的なものである。宗教的觀念は最もよく集團的實在を表はす集團的觀念である。されば思惟の諸範疇は宗教より生起せるものであるとすれば、彼等は一切の宗教的事實に共通する性質を有するものであらねばならぬ。即ち彼等も亦社會的の物、集團的思想の生産物であらねばならぬ。此の事は時間の觀念や空間の觀念の起源を研究して見れば明らかに認められるが、其他の範疇の起源を研究して見ても同様である。かの矛盾と云ふ觀念の如きもやはり社會的條件に依屬して發生せるものと思はれる。而して今此の如く思惟の諸範疇は一般に宗教的思想の生産物にして、社會的起源を有するものと見るに於ては、吾人は認識論上の最も根本的な問題を最も満足に説明することが出来ると思ふ。經驗主義の認識論は大に現實的である。併し思惟の諸範疇の普遍性、必然性、非箇人性等をとて満足に説明することは出来ない。否、な此の認識論の立場からしては、範疇に此等の特性を認めることは出来なくなる。之に反して、先天主義の認識論は、諸範疇の特性を高調することに於て勝れて居る。併し範疇の特性を高調せんが爲めに之を全く自然及び科學の外に置いて居るから、吾人は此の認識

論の立場からしては、如何にして非箇人的理性が經驗を組織し、箇人に於て自己を實現するかを理解することは出来ない。然るに社會學的認識論に於ては範疇の宗教的社會的起源を認むることによりて、一方に於ては先天主義の認識論の主張する如くに範疇の普遍性、必然性、非箇人性を認むると同時に、經驗主義の認識論の精神を十分に受け入れ、經驗的事實を離れずして範疇の本質及び生起を説明することが出来るのである。要するに社會的認識論は相争ふて居る處の先天主義の認識論と經驗主義の認識論との兩者の中に含まるゝ真理を總て吸收すると同時に、又兩者の缺點を總て排斥して、以て兩者を適當に調和し得るものである。社會學的認識論は先天主義の總ての本質的原理を保存すると同時に、經驗主義の實證的精神をよく保持し、理性の特有の力を傷けないと同時に之を觀察し得らるゝ世界より離れずして説明し、吾人の知力的生活の二元性を眞實と認むると同時に自然的原因によりて之を説明することが出来るのである。社會學的認識論は範疇を先天主義の主張する如く原本的な分析することの出来ない事實とは認めないが併し又經驗主義の企つるが如くに簡単に分析することの出来ない甚だ複雑なものとして之を取扱ふのである。範疇は一見して想像される如く、又實際に經驗主義の考へて居る如くしかく簡單な

單純なものではなく、思惟の學問的道具として人類社會が幾多の世紀を通じて絶へず努力して造り上げたもの、人類社會の知力的資本の最善の部分の集積せるものである。人類の歴史の一方面は全く範疇の中に總括されて居るのである。隨ふて範疇をよく理解し之を判斷する爲めには、今日まで一般に用ひられて居るとは異なる方法を用ひねばならぬ。吾人が吾人自から作つたのではない處の此等の概念が如何にして作られたかを理解する爲めには、吾人の意識を自から吟味するだけでは行かない。吾人は吾人の外を眺めねばならぬ、即ち歴史を考察せねばならぬ。

ヅルケムの社會學的認識論の態度及び一般的主意は以上述べしが如きものであるが、余は茲に之れ以上に詳しく彼の説を述ぶる暇はないから、詳しく學びたいと思はるゝ人々は、幸ひに彼の「宗敎生活の元素的諸形態」は近頃英語に譯せられて、我國にも來て居るから、其の書物に付て研究せられたい。併しさきにも述べし如くヅルケムの社會學的認識論はまだ随分粗末なもので、之を西南獨逸派やマルブルヒ派の認識論などとは固より比較することは出来ない。而も範疇の宗敎的社會起源を認むることによりて之を経験の事實によりて説明せんとすると同時に、本來社會的性質、集團的性質のものであるから非箇人的な、普遍的な、必然的なものであると解して、範

疇の先天的特質を十分に承認しつゝ、又其の特質を経験的事實を離れずして説明せんとする處は、確かに認識論の研究上一の新しい見地を提供せるものとして承認される價值があると思ふ。併し此見地は、さきにも述べし如く、ヅルケムが發達させつつある方針とは異なる方針にも之を發達させることが出来るのである。而して其の好適例を示すものは、レヴィブリユルの試みであると思ふ。レヴィブリユルの近著、劣等社會に於ける心理的機能は、さきにも述べし如く、ヅルケム派の社會學の見地から自然人民の心的機能を研究せるものにして、又ヅルケム派の叢書中の一冊として出版されて居るから、大體上ヅルケム派の著作と見做して置いても、差し支へはないと思ひ、此處にヅルケムの社會學的認識論の一發展として之を取扱はんとするのであるが、本書直接の目的は劣等社會に於ける集團的表象を支配する最も一般的な法則を究明せんとすることである。併しレヴィブリユルは更に間接の目的をも念頭に置いて之を研究して居るのである。夫れは彼れ自身の言葉を借りて云へば、比較的方法に基づける一の實證的な新しき認識論を建設せんとすることである。つまりかゝる大事業の準備として、彼は自然人民に於ける集團的表象の一般的法則を研究せんとするのである。

今レザイ、ブリユルの論ずる處によれば、自然人民の集團的表象を研究すると其中には吾人文化人の精神類型とは大に異なる精神類型が発見される。其の最も著しき特徴は論理的矛盾の法則には全く頓着しないと云ふことである。表象と表象との關係は全く論理的矛盾の法則とは關係なく隨ふて文化人の精神類型に於て見るとは全く異なる法則によりて支配されて居る。レザイ、ブリユルは此の法則を「*Joi de participation*」と云ふて居る。適當なる譯語は思ひ附かないから、假りに之を感應の法則と譯して置く。併し此く譯すると誤解を起す恐れがあるから、茲に其意味を述べて置くが、レザイ、ブリユルも此の法則に適當なる名稱を與へ、且つ之を簡單に説述することには非常に苦心したと見へ、此法則の抽象的叙述を始めから與へることは困難であると思ふ。此の法則によりて云ひ表はさんとする事は、吾人の思惟の普通の型には甚だ當てはまり悪いのであるが、とにかく以下論述する處によりて其の意味は十分に理解されやうと思ふ。茲には満足なる公式を與へることが出来ない爲め只出来るだけ夫れに近いことを述べて置く」と云ふて居る。而して彼は此法則によりて云ひ表はさんとすることを二つに別けて述べて居る。一は原始的精神の集團的表象に於ては無情物、有情物現象等は、吾人には到底理解し得られない方法に

て、彼等自身であると同時に彼等以外の或物であり得ると云ふことにして二は同様に理解され難い方法にて、彼等が現に存在する處に存在して居りながら、彼等以外に於て感應せらるゝ種々なる力、性質、功德、神祕的作用等を自から發出すれば、又之を他よりも受けると云ふことである。さればパーチシバシヨンの法則を感應の法則と譯すると只此第二の場合に當てはまるだけで、第一の場合には當てはまり悪いのであるが、茲には感應と云ふ中に第一の場合をも含めて理解して置いてもらひたい。但しパーチシバシヨンと云ふ佛語其物も果して第一の場合を含み得るかは疑問である。

レヴィ、ブリユルは、以上述べしが如き感應の法則が、自然人民の集團的表象を支配する最も一般的なる法則と見るのであるが、かゝる法則に従ふ精神類型は論理的法則に支配されて居る吾人文化人の精神類型とは根本的に性質を異にする處があるから、彼は後者を論理的精神類型と稱するに對して、前者を神祕的及び論理的^{ミステリック、エ、フレンジ}精神類型と稱して居る。而して此の神祕的論理的^{ミステリック、エ、フレンジ}精神類型に付て詳しく論究したる後、終りに如何にして此の神祕的論理的^{ミステリック、エ、フレンジ}精神類型が論理的^{ミステリック、エ、フレンジ}精神類型に轉化し行くかを簡単に論述して居る。茲には遺憾ながらレヴィ、ブリユルの甚だ興味深き研究

を詳しく紹介して居る暇はないから、只以上述べしが如く其の一般の主意だけを簡単に述ぶるだけに止めて置く。レヴィ、ブリユルの此著作はまだ英語には譯されて居らないが、ポールドウインの近著「心理學史」(Baldwin, History of psychology. 1913)の第一巻の始めに少しくレヴィ、ブリユルの説を紹介して居る。

今レヴィ、ブリユルの研究によりて考ふるに、今日哲學者の認識論に於て思惟の範疇と見做さるゝものは論理的な精神類型の特有物であつて、神祕的論理前的精神類型には存在しないものである。例へば空間と云ふ概念は論理的な精神類型に於ては同質的な無限の廣がりとして解されて居るが、かゝる空間概念は神祕的論理前的精神類型には全く存在しない、其處に存在する空間の概念と云へば夫れ夫れの部分が夫れ夫れ特別な意味を有つて居るものである。即ち異質的な有限なる部分から成立して居るものである。時間の概念に付ても同じ事であり、又數の如き抽象的なもので神祕的論理前的精神類型にありては、總て夫れ夫れ具體的な意味を有つたものである。要するに神祕的論理的な精神類型に於ける認識は論理的な精神類型に於ける認識とは大に異つて居るのである。而して神祕的論理前的精神類型が段々論理的な精神類型に轉化するにつれて、夫れ夫れの具體的な觀念からして哲學者の云ふ思惟の範疇

の如き抽象的な概念が發達してくるのである。然らば如何なる原因によりて此の轉化が段々に行はれて來るかと思ふに、夫れは根本的に社會的なる原因によりて行はれるのである。レヴィ、ブリユルが此點に付て論じて居ることは甚だ簡單で又粗雑であるが併し甚だサツゼステヂである。吾人は彼のヒントを傳ふて進んで行くと社會學上に於ても亦認識論上に於ても大に得る處があらうと思ふのである。而して余自身は余の社會學上の原理を詳しく展開して、行くに付て、レヴィ、ブリユルの此著作に負へる處少くないのであるが、認識の社會的考察に於ても余は彼の進みつゝある方針は最有効なものと思じて居る。隨ふて又此方面の研究に於て些少なりとも貢獻して見たいと思ふて居るのである。但し余はレヴィ、ブリユルの説は完全無缺であると云ふのでもなく、又余自身は彼の説を全く其儘に受け入れて居るのではない。少しく注意して彼の著作を閲讀する人には、彼の説には賛成し難い點の少ないことを直ぐに發見するであらう。併し大體の方針に於て余は彼の説が社會學的に認識を考究する上に最も有効なものであると信ずるのである。

終りに一言して置きたいことは、社會學的認識論と云ふ名稱に付てゝある。別段此の名稱を用ひても悪いと思ふことはない。併し何んだかあまりに大袈裟に聞へ

るから、温しく認識の社會學的考察と云ふて置けば良からうと思ふ。惟ふに認識論は最も困難なる研究にして、到底或單一なる方法のみによりて完全に研究し盡されるものでない。吾人は種々なる方法が夫れ夫れ貢献するものなるをよく會得して之を併用することが必要である。經驗主義の論者は先驗主義の論者の語を悉く空想の如くに見做して之を排斥し、之に反して先驗主義の論者は經驗主義の論者の説と云へば一概に淺薄と見て之を摺斥するは共に認識論の健全なる發達上に有害である。兩者の協働によりて茲に認識論は最も健全なる發達を遂げることは出来るのである。一派の偏狹なる哲學者は先驗的方法が現象學的方法の如きものかを用ゆる認識論でなければ直ちに淺薄であるとして摺斥するが、是れは認識論の爲めに甚だ有害なる態度である。我が京都帝國大學に於ては幸ひに此の如き偏狹なる哲學者は居らない。殊に我國の認識論の大家西田教授の如きは寛大なる態度を持ち、認識の社會學的考察にも温たかき同情を寄せられて居ることは大に余輩の意を強ふするのである。されば余は我が京大哲學科出身の有望なる若き哲學者の群れの中からも認識の社會學的考察に大に努力せられる人々の起らんことを切望するのである。(大正五年十月京都哲學會秋期大會講演)